

「国立台湾大学日本史院生交流プログラム参加報告書」

京都大学文学研究科 2年 木土博成

① 報告者は本プログラムにより台湾に派遣され、国立台湾大学が所蔵する「琉球関係史料」を閲覧することができた。その中には、日本国内に現存しない琉球王府の日記も含まれており、これまで国内の史料しか見てこなかった報告者としては、貴重な史料調査の場を持つことができた。閲覧に際しては、当史料の責任者である司書の方とお話することができ、「琉球関係史料」の伝存経緯などについて、ご教示いただいた。話題は、これからの台湾人研究者と日本人研究者の共同研究のあり方などにも及び、自身のこれからの研究活動のあり方を考えさせられる場としても重要であった。

これらの史料や人との出会いを経験したことで、自身の専攻する日本史学が国際的な広がりを持つ学問であることを認識するとともに、世界史の中の日本史像の構築という新たな課題に向け、今後継続的に取り組んでいく意欲がわいた。現在は、韓国にある「宗家文書」の調査を計画している。

② 滞在期間中は週末を除き、台湾大学に通った。図書館に居たほかは、研究室や教室を訪問し、積極的に学生・院生と交流した。彼らの日本に関する関心は日本語だけでなく、日本文学・日本史などにも広がりを見せ、とりわけ能などの伝統文化に対する関心が高かった。報告者が日本史、特に琉球関係を研究していることを伝えると興味を示した方もあり、個別に問い合わせが何件もあった。

その他、日常生活においても、秩序を重んじる台湾の人々の姿勢が印象的であった。交通は京都市の百万遍付近より整序だっており、安全に対する意識の高さに驚いた。漠然と、日本特有のものとして理解していた現象が台湾では随所に見られ、日本を相対視する機会が与えられた。なお、台湾大学の椰子並木道は大変結構な眺めであるが、まれに椰子の実が落下し、危険な場合もあるという情報を台湾人から聞いた。酒の席であり、あれが台湾人一流のジョークだった可能性もあるが、注意するに越したことはなさそうだ。

③
研究報告

2月21日に研究生発表会にて「「附庸」か「異国」か—17世紀の琉球をめぐる責任の所在—」と題して発信し、台湾大学等の教授からコメントを受けた。報告者の課題設定が日本一国史に収斂しない点を評価する声があった一方で、報告者の史料解釈について質問がなされ、あわせて台湾における関連史料の所在についての教示もあった。

史料調査

台湾大学総合図書館の特別収蔵庫にて「琉球関係史料」を実見した(①参照)。その他、国家図書館などの施設で史料調査を行い、適宜、論文・図書のコピーを取った。

史跡調査

「紅毛城」などのオランダ関係史跡を訪れ、地形や建物の様子を実見した。その立地が防衛拠点として理にかなっている点を実感するなど、文字資料だけではうかがい知れない感触を得ることができた。

日本文化発信

台湾大学の歴史専攻の学生に対し、江戸時代の古文書に書かれた「くずし字」を読むにはどのように辞書を引いたらよいか、現代日本語と江戸時代の文語の違いは何か、といった点を、薩摩藩の史料にもとづいて具体的に解説した。また、日本と台湾それぞれの学界状況や研究動向などについて情報交換した。先方の主な関心は、現在の日本の学界でどういったテーマが流行しているか、日本史の史料は台湾史の史料と比べどのような特徴があるか、といった点にあり、それぞれ可能な限り解説に努めた。なお、帰国後もメールを通して情報交換が続いており、正確な発信をすべく、報告者自身が日本の研究史や、日本史史料の特徴を勉強し直すなど、結果的に自身の研究に資した部分も多々ある。

ゼミへの参加

受け入れ教官の辻本雅史教授から、教授の専門とされる思想史・教育史について個別に指導を受けるとともに、教授の担当ゼミ「高級日本語」を受講した。受講により、日本語を母語としない人々に、日本語ないし日本について発信する際の技術を磨いた。

④ まずは今回調査した史料や、研究報告時に頂戴したコメントを活かし、学術論文の公表に努めたい。続けて今回調査が至らなかった史料群について、再調査を果たしたい。更には、今回知り合った同年代の台湾人研究者との交流を足がかりに、自身の専攻する日本史の海外普及に継続的に携わっていきたい。